【無料配布】短編ミステリ

～文学フリマ福岡10のための書き下ろし～

トロッコのゆくえ

作：庵字

「先日、主婦が若い女性を轢いてしまった交通死亡事故があったろ」
探偵の事務所を訪れた警部は、そう言いながら定位置のソファに腰を下ろした。
ええ、と応じた探偵は、オリジナルブレンドのコーヒーを出しながら、
「もちろん知っていますよ。目撃者によれば、まるで急ハンドルを切ったように、左手にある歩道に突っ込んだと。で、その歩道を歩いていた女性が……」
「そうだ。その〝急ハンドルを切ったように〟というのが問題視された」
「ですね。なんでも、車の進行方向には複数名の男女がいて、もし、車がそのまま直進していたら、その人たちが轢かれていただろうと」
「マスコミは〝トロッコ問題事故〟なんて呼んでいたな」
「有名な思考実験から名付けたんですよね。軌道上を暴走するトロッコの先に、五名の作業員がいる。その様子を見ていた目撃者の手元には、トロッコの進路を切り替えるスイッチがある。そのスイッチを入れれば、トロッコは進路を変えて作業員たちは助かりますが、その切り替わった進路の先には、また別の作業員がひとりいて、代わりにそのひとりが死んでしまうという。まさに、このケースにぴたりとあてはまる事象だったわけですね」
「ああ。運転手の主婦は、そのまま車が走るのに任せて複数人の人を轢くよりも、歩道に突っ込んでひとりの人を轢くほうがいいと判断したと、マスコミはこう言うんだな、もっとも、その答えを知る術はないわけだが」
「その運転手の主婦も死亡してしまいましたからね」
「そうだ。そもそも、車が暴走してしまった原因が主婦にあったんだ。その主婦は持病持ちで、時折心臓発作に見舞われることがあったという。今回、運悪く運転中に発作を起こしてしまったというわけだな。でも、朦朧とした意識の中にあっても、最後の力を振り絞ってハンドルを切ったんだろうと見られている」
「その発作に加えて、事故時の衝撃もあいまって、運転手の主婦は、被害者もろとも亡くなってしまったんですよね。どちらも即死だったとか」
「ところがだ、この事故、単純に〝トロッコ問題〟に落とし込むわけにはいかなくなった」
「どういうことです？」
「轢かれた女性が、運転手の主婦と関わりがあることが分かったからだ。轢かれた女性は、主婦の旦那が勤める会社で働いていて、どうやら、旦那と不倫関係にあったらしい」
「本当ですか？」
「状況証拠や、それを匂わせる証言は山ほど出てきた。間違いないだろう。つまりだ……運転手の主婦が車を歩道に突っ込ませたのは、不可避の事故に対して、被害者がより少なくなるほうを選択したという倫理的問題なんかじゃなくて、単純に私怨によるものだった可能性が高くなったってことだ」
「運転中に心臓発作を起こしてしまった主婦は、朦朧とした意識の中、偶然、歩道を夫の不倫相手が歩いているのを見てしまう。そこで、どうせ車を止められないのなら、無辜の一般人よりも、憎き不倫相手を死なせてやろうと……？」
うん、と警部は頷いて、出されたコーヒーにミルクと砂糖を大量投入した。
「証拠はあるんですか？」
ブラックのままコーヒーに口をつけた探偵に訊かれた警部は、
「ない。繰り返すが、被害者も加害者――これが殺人としてだが――も死んでるんだ。聴取のしようもない。ただ、運転手だった主婦が、旦那の不倫も、その相手のことも知っていたのは間違いないようなんだな。しょっちゅう愚痴を漏らしていた、という友人らの証言がある」
「それだけでは、故意かどうか証明することは不可能でしょうね」
「そうなんだ。君ならば、何か打開策を見つけられるかと思って、藁にもすがる思いで来てみたんだが」
「ひどいですね、警部。僕は藁ですか」
「藁は藁でも、鉄筋コンクリート製の藁だと思ってるよ」
「もはや藁じゃないじゃないですか。そもそも、コンクリートは水に浮きません」
尖らせた口を、すぐに引っ込めた探偵は、「まあ、確かに気にはなりますね。運転していた主婦が発作を起こした、というのは事実なんですか？」

「ああ、検死に加えて、彼女の主治医からも聴取した。間違いない」
「主婦の運転する車の脇を、夫の不倫相手が歩いていた、というのは？」
「それも偶然だな。二人の行動を洗ってみたが、どちらかが一方に意図的に近づいたという痕跡はまったくなかった」
「主婦と女性、二人の接近と、発作による車の暴走は完全な偶然の産物……。でも、警部、仮に、主婦が殺意をもって夫の不倫相手を轢いたのだとして、今さらどうしようというんですか？　どちらも死亡しているのに」
「警察としては看過できない問題だろ。事故で片付けるわけにはいかない。被疑者死亡のまま送検するつもりだよ」
「起訴できるだけの証拠が出てくるとは思えませんけれどねぇ……」
「君の手腕にかかっているというわけだ」
「そんな無茶な……。まあ、他ならぬ警部の頼みですから、やれるだけのことはやってみますよ」
「そうこなくちゃ」
笑みを浮かべて警部は、甘いコーヒーを喉に流し込んだ。

後日、探偵に呼び出された警部は、再び事務所を訪問した。
「警部、起訴できるかもしれません」
「本当か？　主婦の殺意が証明されたのか？」
「違います」
「なに？」
「起訴できそうなのは……夫ですよ」
「……はあ？」
「調べによると、夫は事故のあった日は出張に出ていたことになっていますが」
「ああ、確かにそう証言していた」
「それは嘘です」
「なに？　じゃあ、本当はどこにいたというんだ？」
「車内です」
「車内……って、まさか？」
「そのまさかです。夫は、出張先での用事が早く終わったので、予定を繰り上げて当日の朝に帰ってきていて、その日は妻と買い物に出ていたんですよ」
「妻が運転する車に乗って」
「そうです。で、走行中にハンドルを握っていた妻が発作に襲われた。そこで偶然にも、歩道に不倫相手の女性の姿を見つけてしまった夫は、咄嗟に助手席からハンドルを掴み……」
「車の進路を変えて、不倫相手を轢いたと？　どうしてそんなことを？」
「ずるずると関係を続けるうちに、面倒な事態になっていたのかもしれません。かといって、妻に対してもすでに愛情は失せ、辟易していたとしたら？」
「邪魔な不倫相手と妻、二人を同時に亡き者にしようと……？」
「恐ろしい偶然を、神の御業のごとき絶好の機会と捉えたのでしょうね。衝突後、夫はエアバッグの隙間から這い出て逃走したんです。歩道があったのは車の進行方向に向かって左手だから、助手席側は歩道の脇に立つビルの陰になります。それも逃走を手助けする要因になった。目撃者が少ないことも幸いしました」
「どうして、夫が怪しいと見抜いた？」
「妻と愛人の二人を同時に亡くしたというのに、その夫は妙に元気というか、以前よりも活き活きと仕事をしていた、と同僚らから証言を得ましてね」
「証拠はあるんだよな？　起訴できると言っていたから」
「車のハンドルカバーを調べて下さい」
「ハンドルカバー？　そこに、何が？」
「夫の指紋が出てくるはずです」
「車は夫婦の所有物だ。夫の指紋が出てきたっておかしくない」
「そのハンドルカバーですが、事故のあった前日に発売されたばかりの商品なんですよ。主婦が好きなキャラクターものの。だから、そのハンドルカバーが取り付けられたのは、どんなに早くても事故日の前日のはずです。その日には出張に出ていたはずの夫の指紋が、そこから検出されるはずはないじゃないですか」
（了）

お読みいただきありがとうございます。
「**新生ミステリ研究会**」というサークルで出店しております。
「**D―27、28**」ブースにてお待ちしています！